

## 旧オランダ領アンティル諸島の選択から考える ナショナルアイデンティティ

兒島 峰

### 序

本プロジェクトは、国民国家の主流派がつくるナショナリズム、また、それに抗うマイノリティのナショナリズムについては膨大な研究が蓄積されてきた一方で、既存の国家概念とは異なる集団におけるアイデンティティに関する、地域横断型の研究がなされていないのではないかと、という疑問から始まった。

筆者は、これまで、主に大陸部分のラテンアメリカをフィールドに研究をしており、ラテンアメリカ研究者の常として、キューバ以外のカリブ海地域に関しては、それほど注目してこなかった。

ちなみに、ラテンアメリカというのは、厳密に言えば、南北アメリカ大陸からアングロアメリカであるカナダとアメリカ合衆国を抜いた部分であるが、慣例としてカリブ海地域も含む。

ラテンアメリカ研究者にとって、カリブ海に位置するキューバは、無視することも避けることもできない国である。

歴史的にみれば、ヨーロッパ帝国の凋落とともに隆起したアメリカ合衆国の強い影響のもとで、ラテンアメリカ諸国は実質的な独立を阻まれてきた。

そのようなラテンアメリカにとって、マイアミと目と鼻の先にある小さな島国が革命を成功させ、その直後から始まる帝国の度重なる侵略や破壊活動を許さずにいることは、まさに希望であった。

キューバの姿勢は、現在に至るまで、ラテンアメリカ諸国に多大な影響を与えている。

それは、アメリカ合衆国と距離を置き、キューバとの連帯を深めることで、豊かな社会の構築を目指すベネズエラ政府やボリビア政府の今日の姿にも示されている。

文化や人の移動といった側面では、カリブ海にあるドミニカ共和国と、ア

アメリカ合衆国の自治領となっているプエルト・リコが、スペイン語という言語を共有していることもあり、ラテンアメリカとの相互の交流がみられる。

一例を挙げれば、ドミニカ共和国出身のファン・ルイス・ゲーラ (Juan Luis Guerra) やプエルト・リコ出身のリッキー・マルティン (Ricky Martin) は、長らくメキシコを活動の拠点としており、スペイン語圏ではよく知られるミュージシャンである。そして、キューバの社会派ミュージシャンであるパブロ・ミラネス (Pablo Milanés) は、かつて、プエルト・リコとキューバは同じ一羽の鳥の翼だと歌った。

1898年、スペインからの独立を求めて闘ってきたキューバ独立戦争で、キューバ側の勝利がほぼ確実であった時点で介入したアメリカ合衆国が、キューバを保護領にし、同時期にキューバ同様にスペインからの独立戦争さなかであったプエルト・リコを米国領にした。キューバ、プエルト・リコ両者にとって、独立が大国に横取りされた屈辱的な出来事であったが、その後、キューバは、1959年に革命を成功させ、実質的にも独立を勝ち取った。一方のプエルト・リコは、依然として、アメリカ合衆国の自治領となっている。

この歴史を、パブロ・ミラネスは、1979年に発表した『キューバからプエルト・リコへのソン (Son de Cuba a Puerto Rico)』で、「プエルト・リコとキューバは一羽の鳥の二つの翼。ともに羽ばたきたかったのに、一方の翼は海に落ちてしまった。それが、プエルト・リコ。飛べなかった翼。だけど、僕は、一緒に羽ばたこうと君をいざなう。一緒に、大空を目指そうよ」と甘い声で誘い、連帯を示した。

しかし、カリブ海地域にあるその他の諸島の存在感は、希薄であると言わざるを得ない。そして、その諸島同士の連帯意識も、同様に、薄い。

この理由として、カリブ諸国それぞれの経済規模が小さいことに加え、宗主国が異なっていたことから言語や植民地政策が異なっていたことが挙げられる。

植民地政策が異なれば、独立意識や宗主国との関係も異なってしかるべきであろう。実際、この地域には、キューバ、ハイチ、ドミニカ共和国といった独立国のほか、前述したアメリカ合衆国の保護領プエルト・リコ、イギリス連邦に加盟している独立国、イギリスの海外領土、フランスの海外県、そ

して、オランダ領とオランダ王国を構成するオランダの国など、政治形態も言語も多様な島がある。

このような多種多様な特徴が混在するカリブ海地域の総合的な研究を目指すとなれば、大掛かりな研究チームが必要となるであろう。

本プロジェクトのスケールは、そのような壮大なものではない。しかし、これまでほとんど注目されてこなかったこの地域におけるアイデンティティの諸相と揺らぎに注目することで、既存のナショナリズムや国家概念とは異なる概念の萌芽をとらえようとするものである。

本プロジェクトで筆者が注目したのは、2010年に起こった新しい「国」のあり方である。

2010年10月10日、オランダ領アンティルと呼ばれていたカリブ海の6島が解体し、オランダ王国は、「一つの王国、四つの国」となった。この四つの国が、アルバ、キュラソー、シント・マルテン、そして、オランダである。つまり、「一つの王国、一つの国」ではなくなったのである。

オランダ王国が「一つの王国、四つの国」となってから、まだ日は浅く、本文で述べるように、それぞれの状況も流動的である。

折しも筆者がフィールド・ワークを行った2019年2月は、オランダ王国の構成国となったアルバやキュラソーと地理的に近いベネズエラに対してアメリカ合衆国が侵攻しようとしており、米軍の侵攻を阻止しようと、ベネズエラ政府が陸、空、海路を封鎖したときであった。このため、島には、ベネズエラとの交易が途絶えたことによる品不足と経済的混乱が生じ、また、オランダ王国が米軍のためにキュラソーの軍事拠点の使用を認めたことに対する反発も高まっていた。さらに、時期を同じくしてアルバ・エアラインが倒産するなど、カリブ領域はかなりの混乱に陥っていた。

このような諸般の事情から、当初、予定していた、しばしばABC諸島と呼ばれ、地理的にも近いキュラソー、アルバ、ボネールの3島を巡ることができなかった。

これら3島は、地理的に近接しているにもかかわらず、オランダ王国との関係や自治をめぐる、非常に異なる姿勢を示している。

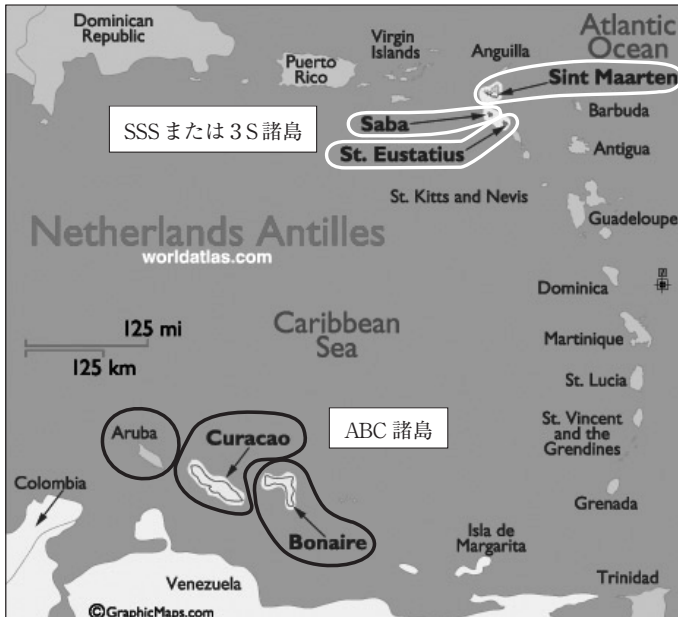
アルバは1986年にオランダ領アンティルを離脱、キュラソーは2010年にオ

ランダ領アンティルを離脱、そして、ボネールは2010年以降もオランダ領アンティルに留まっており、これら3島でフィールド・ワークをすることによって、「国」や「自治」に関する比較研究ができるのではと考えていた。しかし、一方で、筆者が訪れた際に生じた様々な混乱は、島をめぐる危機的状况に際するオランダ王国の対応と島の人たちの感情のすれ違いなどが顕著となる様子を観察することができたともいえる。

本稿では、まず、一般には馴染みが薄い、旧オランダ領アンティルについて述べ、次に、オランダ領アンティルが解体に至った経緯を記し、最後に、旧オランダ領アンティルにおけるナショナリズムについて検証する。

### 1. オランダ領アンティル（1986年以前）

旧オランダ領アンティルは、地理的に、ベネズエラ沖にあるABC諸島（Aruba, Bonaire, Curaçaoの頭文字）と、リーワード諸島に位置するSSSまたは3S諸島（Sint Maarten, Saba, Sint Eustatiusの頭文字）に分けられる。



Map: www.worldatlas.com を基に筆者作成

ベネズエラからの距離は、アルバまで24キロ、キュラソーまでは60キロ程度で、ベネズエラからアルバまでのフライト時間はわずか8分だという。ABC諸島間の距離は、アルバとキュラソー間が30キロ、キュラソーとボネールは80キロ程度である。

言語文化的にも、ABC諸島とSSS諸島では異なり、ABC諸島ではパピアメント語が日常的にもっとも話される言語であり、SSS諸島では英語がもっとも話されている。

パピアメント語とは、スペイン語とポルトガル語の影響を強く受けた混成言語で、フランスの海外県で話されているクレオール語と同様、文法をもたない言語とみなされていたが、2003年にGerda Dunkが文法構造を発見し、オランダ政府も、パピアメント語は世界言語であるというDunkの主張を承認した。文法構造はスペイン語やポルトガル語より簡略化されているが、時制の概念はスペイン語に非常に近い。このため、パピアメント語のネイティブ・スピーカーは、オランダ語の、特に時制に関する文法構造を理解することが難しい。

オランダ語は公用語にはなっているが、後に述べるように、ABC諸島でもSSS諸島でも、オランダ語のネイティブ・スピーカーはむしろ少数派であり、全諸島内でも10パーセン



キュラソーのパピアメント語学校と Gerda Dunk。  
ヨーロッパから移住してきたオランダ人が通う。

トに満たない。ABC諸島の公用語は、パピアメント語、オランダ語、英語であるが、実際には、パピアメント語さえ話せれば日常生活に苦勞することはなく、パピアメント語が分からない場合は、英語よりスペイン語の方が重宝する。逆に、オランダ語しか話せない場合は、日常生活でかなりの不便を強いられる。なお、観光客向けのレストランなどでは英語が通じる。

各島の基本情報は以下の表のとおりである。

ちなみに、アンティル諸島で最大の島であり独立国のキューバは、島の面積10万9900平方キロメートル、人口1134万を有しているが、本プロジェクトで調査対象となっている島は、いずれも、規模が小さい。旧オランダ領アンティル最大の島であるキュラソーですら、面積は横浜市と種子島の間、最小の島であるサバは、面積は波照間島程度の大きさであり、人口は南大東島程度である。

なお、参考までに、1960年代以降にイギリスから独立したカリブ諸島、お

表1. 各島の基本情報

地 域 (島)	面積 (km <sup>2</sup> )	人 口	島のステータス
キュラソー	444	16万4000弱	2010年オランダ構成国
アルバ	180	11万2000	1986年オランダ構成国
ボネール	294	1万8000	特別自治体
シント・マルテン	34	4万	2010年オランダ構成国
シント・ユースタティウス	32	2800	特別自治体
サバ	13	1600	特別自治体
参 考			
種子島	445	3万3000	
横浜市	437.4	372万5000	
南大東島	30.57	1418	
波照間島	12.73	489	
バルバドス	431	28万6600	1966年イギリスから独立
トリニダード・トバゴ	5130	139万5000	1962年イギリスから独立
ドミニカ国	750	7万1000	1978年イギリスから独立
セントルシア	620	18万1000	1979年イギリスから独立
セントヴィンセント・グレナディーン	390	11万	1979年イギリスから独立
セントクリストファー・ネイビス	260	5万2000	1983年イギリスから独立
マルティニーク	1128	37万5000	フランス海外県
グアドループ	1705	40万	フランス海外県

よび、フランス海外県の基本データもあげておく。

バルバドスはキュラソーとほぼ同じ面積であるが、人口ではキュラソーを上回っている。一方、セントルシアは、島面積ではキュラソーとアルバを足したほどで、人口はキュラソーより若干多い。そして、フランス海外県であるマルティニークとグアドループは、島面積も人口も、オランダ領アンティルのどの島よりもはるかに大きい。

独立を考えた場合、島の規模は、当然、影響するであろう。しかし、カリブに位置する旧英領の独立国は、独立してはいるものの、イギリス連邦の一員であり続けており、かつ、地域統合であるCARICOM（カリブ共同体）を構成している。小規模の島の自治・独立には、宗主国との関係も考慮に入れる必要がある。

歴史的には、1602年に東インド会社、1621年に西インド会社を設立したオランダは、1600年代初頭からイギリスとの海上の覇権争いである英蘭戦争が勃発するまで、世界に冠たる帝国としての地位を確固たるものにしてきた。カリブ海にある旧オランダ領アンティル諸島は、いずれも、1630年代から1640年の間にオランダの植民地となっている。なお、西インド会社は、カリブ海域だけではなく、アメリカ大陸部分、ブラジルまで支配をのびしており、現在のスリナムもオランダ領ギアナという名で長い植民地支配を経験した。

オランダ領カリブの拠点となったのはキュラソーで、オランダが植民地を展開し始めた17世紀初頭に、アンティル諸島の拠点としてキュラソーに商館が置かれた。そして、1670年から1815年にかけては、ギアナとともに、オランダの奴隷貿易の中心地としてにぎわった。

よく知られているように、カリブ海地域の先住民は早い段階でヨーロッパ人によって絶滅に至らしめられ<sup>1</sup>、その後、奴隷貿易によってアフリカ大陸から黒人<sup>2</sup>が輸入された。

- 
- 1 国本によると、ドミニカ島に、推定で約3400人のカリブ人がヨーロッパ人に屈せずに生き延びている〔国本 2017:49〕。しかし、いずれにせよ、コロンブス到来時には150から300万人いたと推測されている先住民が、ほぼ絶滅させられたことには変わりはないであろう。
  - 2 筆者は、人類学者的ではなく、恣意的に創造された社会的構築物であるという立場をとっている。本稿で「黒人」や「白人」といった呼称を用いるのは、可視化された外見が植民地主義と密接に結びついているからであることをここに断っておく。

カリブ地域のオランダの植民地は、その領有権を争ったイギリスおよびフランスとの間で、それぞれ1814年のロンドン条約、および、1815年のパリ条約によって確定した〔加藤 2014：12〕。その後、1845年に、「キュラソー島および属島 (Curaçao and Dependencies)」と名づけられる。なお、ABC諸島で奴隷が解放されるのは1863年であった。

宗主国であったヨーロッパのオランダのほうは、1813年にフランスから独立し、ネーデルラント連合を構成するも、ベルギーが分離、1830年にオランダ王国を正式名称とし、現在に至っている。

カリブ海地域のオランダは、現在に至るオランダ王国の発足とほぼ同時に、オランダを構成する地域となったことになる。

オランダ領アンティルという名称となるのは、ヨーロッパ諸国によってオランダの領土であると認められたそのおよそ100年後、1948年のことである。1954年12月15日には、オランダ王国憲章が改正され、オランダ領アンティルは、オランダ領ギアナとともに、オランダ王国を構成する、オランダ本国と対等のパートナーと位置づけられた。

ちなみに、オランダ植民地間では人の移動、すなわち、植民地内移住がかなり頻繁にあったという〔北村 2016〕。1975年にスリナムとして独立したオランダ領ギアナには、奴隷制が廃止された後（スリナムの奴隷制廃止もABC諸島と同じ1863年）、当時イギリス領だったインドや、今日のインドネシアであるオランダ領東インドから契約労働者が導入されたことから、現在でも、人口比におけるインド系とインドネシア系が人口の半数を占めている<sup>3</sup>。また、独立後も、旧オランダ植民地内での移住は、選択肢としては優先順位が高く、オランダ領であったインドネシアで1965年にいわゆる9・30事件と呼ばれる軍事クーデターが発生すると、インドネシア人とは異なる民族カテゴリーとされ、かつ、上昇志向が強いために知識層となっていた華人に対する弾圧を恐れた人たちのなかに、新しい移住先として、キュラソーをはじめとする別

3 スリナムでは契約労働者がその後も帰国せずに定住しており、ヒンズー教徒は人口の27パーセント、イスラム教徒は20パーセントを占めている。また、奴隷制廃止前より中国からの契約労働者が導入されていた。このため、スリナムでは黒人系はむしろ少数派となっている。



のオランダ領植民地を選んだ人も少なくなかった [北村 2016]。ヨーロッパのオランダよりもキュラソーを選んだのは、寒冷なヨーロッパ・オランダより、インドネシアと類似しているカリブの温暖な気候が大きな要因だったようである [北村 2016]。

カリブ海地域では、イギリス領だったトリニダード・トバゴにも、奴隷制廃止後の労働力として同じイギリス植民地だったインドからの労働力が投入されたため、インド系が多い。しかし、オランダ領アンティル諸島、特にABC諸島では依然として黒人系が人口の大部分を占めている<sup>4</sup>。

ABC諸島には、東インドという距離的に離れた地域からの人の流入もあったが、やはり、近隣のカリブ海諸島、そして、地理的にも近い南米大陸からの人の移動が最も顕著である。

ABC諸島ではスペイン語が非常に有効であることは前述したが、ABC諸島でスペイン語が有利なのは、すでに述べたような文法的類似性のほか、地理的要因から、ベネズエラやコロンビアとの交流が古くからあったことが挙げ



地元の人のための乗り合いバスの案内には、パピアメント語はあるが、オランダ語はない。(キュラソーのバス会社による車内での注意事項：2019年3月5日 筆者撮影)

4 乾燥しているキュラソー、ボネール、アルバには、塩田開発や牧畜のために、アフリカから奴隷が導入された [国本 2017]。



3種類の案内板が取り付けられた乗り合いバス。左と右下はバス会社が公式に出しているもの。右上の案内はポルトガル語、スペイン語、英語となっている。(2019年3月5日 筆者撮影)

られる。今でいうベネズエラのカラカス出身でラテンアメリカ解放の父と称えられるシモン・ボリーバルも1812年にキュラソーに滞在していたことにも示されるように、古くから大陸との交流が発達していた。現在でも、多くの観光客や移民、一時居住者が見受けられる。

また、政治的・経済的な安定を求めて移住を決意した際、スペイン語が通用するということ、および、ヨーロッパへの将来的な移住の可能性を求めて、ベネズエラ、コロンビア、そして、ドミニカ共和国からの移住者も多い。

## 2. オランダ領アンティルの解体

オランダ領アンティルの解体の始まりは、1986年のアルバの「離脱」である。これをきっかけとして、2010年にオランダ領アンティルは解体され、オランダ王国憲章2010によって、オランダは「一つの王国、四つの国」と定められた<sup>5</sup>。

2021年1月現在、オランダ王国は、オランダ、アルバ、キュラソー、シント・マルテンの4つの構成国から成立する。また、このほか、カリブ海域に、

ボネール島、シント・ユースタティウス島、サバ島という三島の領土を所有しているが、この3島は、特別自治体として、オランダ本土に組み込まれている。

アルバの「離脱」は、当時6島で構成されていたオランダ領アンティルからの「離脱」であったが、この「離脱」は、10年後のオランダ王国からの「独立」を想定してのことであった。

その後、アルバは独立を断念する形で、現在のようにオランダ構成国となったが、それには、1986年以降の国際情勢、および、アンティル諸島内の情勢の変化が大いに影響している。

この節では、オランダ領アンティルの解体に至るプロセスを二つの時代に分けて検証する。まず、1986年にアルバがオランダ領アンティルから離脱した経緯、そして、アルバの離脱がオランダ領アンティルにもたらした影響から2010年のオランダ領アンティル解体に至るまでである。

## 2-1. アルバの離脱に至る要因

アルバの離脱には、主として次の二つの原因があった。①スリナムの独立、②キュラソー暴動に端を発した「人種」に基づく社会構造である。

オランダ領ギアナは、1975年にスリナムとして独立したが、オランダ領アンティル諸島内では、スリナムが独立すれば、オランダ本国がスリナムと地理的に近いアンティル諸島への経済的・政治的な締め付けを厳しくするのではないかという懸念が浮上した。一方、アルバでは、スリナムが独立するのであれば、次に続くのは自分たちだという意識が隆起し、スリナムから政治家を招待し、議論を交わしたという [http://www.kabga.aw/WP]。アルバが「離脱」を表明した1986年の時点では、離脱は独立運動の一環であり、離脱から10年後には独立することを想定していた。

ちなみに、カリブ海地域では、1960年代から、主にイギリス領だった地域

<sup>5</sup> アルバ、キュラソー、シント・マルテンは自治領と訳されることもあるが、本稿では、在日オランダ大使館・領事館・名誉領事館のウェブサイトにある「国」という言葉を使用する。在日オランダ大使館・領事館・名誉領事館のホームページでは、オランダについて「一つの王国、四つの国 (One Kingdom - Four Countries)」と謳っている [www.orandatawashi.nl]。

で独立へ向けた動きが起こっており、1960年代以降に独立した国は、スリナムを除くと、すべて旧イギリス領である<sup>6</sup>。また、世界に目をむければ、1954年にアルジェリアでフランス支配からの解放闘争が始まり、1956年にはイギリスとエジプトによって信託統治されていたスーダンが、1957年にはガーナがイギリスから独立、翌年にはガーナのンクルマによって全アフリカ大陸の解放が呼びかけられた。1950年代から70年代にかけては帝国主義弾劾の声が最高潮に達した時期であり、アフリカ大陸では30以上もの国がヨーロッパからの独立を勝ち取り、1959年にはアンティル諸島最大の島、キューバが革命を成功させ、名実ともにアメリカ合衆国からの独立を果たした。

このように、世界を席卷していた独立を求める風潮が、スリナムの独立、それに続こうとするアルバによる、将来的な独立への第一歩としてのオランダ領アンティルからの離脱にあった。

しかし、オランダ領アンティルを構成するすべての島が、スリナムの独立に続こうとしたのではない。

オランダ領アンティル最大の島キュラソーでは、むしろ、独立を目指すのは少数派であり、スリナムに続けと意気込んだのはアルバだけといってよい。しかし、オランダ領を構成する、地理的にも近い、カリブ海に面したギアナが独立したことによって、6島で構成されてきたオランダ領アンティル諸島内での地理的近接性と遠隔性、および、経済格差が、オランダ王国にとっても、そして、諸島内でも、問題として意識されるようになっていく。

1950年代から70年代に世界中で起こった帝国主義弾劾の主張が、政治的経済的側面だけではなく、「人種」問題を含んでいたことは明白である。そもそも、植民地主義自体が、「優等人種」による「劣等人種」支配を肯定するものであったから、「褐色の世界」の独立が、同時に、「白人優位」思想の否認を伴うのは当然のことであった。

それが、②に挙げたキュラソー暴動である。

旧オランダ領アンティル諸島間には、歴史的にみても明白な経済格差が存在していたが、20世紀にはいると、アルバとキュラソーに設けられた石油精

<sup>6</sup> イギリスから独立したカリブの国々は、独立後もイギリス連邦を構成しており、旧宗主国との密接な関係を維持している。

鍊所によって、この二つの島は経済的におおいに潤うようになった。

石油精鍊所は、1914年、ベネズエラのマラカイボで油田が発見されたことをきっかけとして、1918年にロイヤル・ダッチ・シェル社がキュラソーに精鍊所を設立し、1924年にはアルバにも、エクソンの系列会社でカナダに本社を置くラゴ・オイルカンパニーが、アメリカ合衆国へ輸出するための石油精鍊所を設立している。

アンティル諸島民にとってのオランダ王国の意味を調査したOostindieとVertonは、キュラソー暴動が起こった1969年を、オランダ王国とオランダ領アンティル諸島との関係に決定的な変化を生じさせた歴史的転換点と位置づけている [Oostindie & Verton 1998]。

1969年5月30日に発生したキュラソー暴動の直接的な要因は、石油精鍊所の労働者と会社との労働争議であったが、その背景は根深く、植民地時代から続く人種に基づく差別が根底にあった。

石油精鍊所は、キュラソーに、好景気と経済的な繁栄をもたらし、雇用を生み出したが、1950年代にピークを迎えた後は、産業の機械化などで雇用が衰退していく。そして、その際に解雇されるのは、非白人労働者であった。

そもそも、オランダ政府は、キュラソーに精鍊所を設置すると同時に、オランダ本土から大量の公務員をキュラソーに派遣していた。ヨーロッパからきた「白人」公務員と地元の非白人労働者との給料を含む待遇の違いは明らかで、キュラソー人、および、好景気と雇用を求めてキュラソーに移住してきたジャマイカやトリニダード・トバゴの人たちの多くは、ロイヤル・ダッチ・シェル社との直接契約ではなく、下請け労働者という不安定な雇用状態にあり、給与面でも冷遇されていた。

1969年の労働争議の決裂は、当時、米国で隆起していたブラック・パワー運動なども影響し、キュラソー島における政治権力が白人に牛耳られているという植民地状態、すなわち、自分たちが置かれている抑圧状態を強く意識させることとなった。

非白人労働者が置かれている劣悪な環境に関しては、プエルト・リコの労働者が、キュラソーにおける労働者組合の結成を支援しており、出身地や言語を異にするカリブ地域との連帯がみられた。

一方、キュラソーと同様に石油産業で潤っていたアルバでは、キュラソーの労働者との連帯は示したものの、キュラソーで発生したような暴動は起こっていない。

アルバとキュラソーは、ともに、設置されていた石油精錬所の操業問題、そして、精錬所の閉鎖によって、それまで潤っていた経済の低迷という経験をしたが、同じ経験に対して、異なる姿勢を示した。石油精錬所の問題を機に、アルバでは、将来的な独立を視野に入れて、オランダ領アンティルからの離脱を望む世論が高まっていくのである。

1977年にはアルバで国民投票が実施され、アンティル諸島からの離脱、独立を求める世論が大勢を占めた [Oostindie & Verton 1998]。離脱反対派、すなわち、現状維持派が国民投票へのボイコットを呼びかけるなど、政治的緊張が高まるなか、70パーセントの住民が投票し、82パーセントが自治・独立を支持したのである<sup>7</sup>。

ともに石油産業で潤ったアルバとキュラソーであるが、まず、アルバにおいて、独立を目的としたオランダ領アンティルからの離脱が、島民から絶大な支持を得た。その理由として、まず、アルバでは、島の繁栄にオランダ経済の存在が対立しているという意識が強かったことが挙げられる。オランダの投資や金融政策が、アルバ島の繁栄より、ヨーロッパ・オランダの繁栄に貢献しているという不満が高いのである。

実は、オランダ領アンティル諸島において、オランダ政府の介入が、島の利益ではなく、ヨーロッパ・オランダに恩恵をもたらすものであるという不満を持っている島は多い。さらなるオランダ本国の介入・支援を期待していたのは、6島のうち、シント・ユースタティウスだけであった [Oostindie & Verton 1998]。

アルバが将来的な独立を目指してオランダ領アンティルから離脱すると、今度は、シント・マールテンでも、アルバに続くのは自分たちであるという

---

<sup>7</sup> 石油精錬所による経済への恩恵と、その後、精錬所の閉鎖による経済と人種問題の顕在化という経験を共有しておりながら、なぜ、キュラソーでは独立意識が高まらなかったのか、なぜ、キュラソーではオランダ本土との関係において現状維持が求められたのか、その背景については後述する。

意識が高まる。

このように、1975年にカリブ海に面したスリナムがオランダから独立すると、オランダの領土であったカリブ海諸島にも、独立へ向けた機運が高まっていくのである。

## 2-2. アルバの離脱とその余波



オランダ領アンティルには 1959 年に制定された旗があったが、各島がそれぞれ独自の国旗と国歌を制定する動きが、独立意識の高いアルバを先駆けとして起こっていた。これは、1976 年 3 月 18 日に、国歌「Aruba Dushi Tera (アルバ、愛する大地)」と共に正式に承認されたアルバ国旗。ちなみに、国歌はパピアメント語である。アルバ観光局ホームページ [<https://www.aruba.com/es/nuestra-isla/historia-y-cultura/bandera-aruba>] より

前述したように、オランダ領アンティル解体への具体的な第一歩は、人種主義に基づく植民地支配からの脱却を求める意識の高まりという褐色世界の事情が影響した。しかし、一方では、ヨーロッパ本土の事情も、また、アンティル諸島独立の可能性に影響を与えていくようになる。それが、1993年に発効した欧州共同体 (EC) である。欧州共同体、将来的には欧州連合 (EU) へ向けてヨーロッパで協議が進むなか、ヨーロッパからはるかかなたのカリブ海にあるオランダ領土の位置づけが問われるようになったのである。

現在、オランダ領アンティルを構成していた島は、いずれも、EU法の適用

を受けていない。

カリブ領域には、グアドループやマルティニークといったフランス海外県も存在する。そして、これらは、オランダ領アンティルと同様、地理的にはヨーロッパと呼ぶにはふさわしくない場所に位置している。しかし、これらは「県」としてヨーロッパのフランス本土と不可分であるという位置づけから、EU法の適用を受けている<sup>8</sup>。

なぜ、このような違いが生じているのであろうか。

そもそも、ECの大きな目的は、欧州域内の経済的統合にあり、単一の通貨を共有することで単一市場を形成することにあった。

マルティニークやグアドループでは、フランス海外県としてフランが使用されており、フランス本土がユーロを導入した際、本土と同様にユーロに切り替えた。

一方、オランダ領アンティルでは、そもそもの通貨事情が異なっていた。

ユーロがヨーロッパで導入される以前、ヨーロッパ・オランダでは、ギルダーという通貨が流通しており、オランダ領アンティル諸島でも、オランダ本国と等価のギルダーを、第二次世界大戦前まで使用していた。そして、そのオランダ・ギルダーと等価のギルダーは、キュラソー銀行で発行されていた。

1845年からオランダ領アンティルに改名される1948年まで、この地域が、「キュラソー島および属島」という名称であったことから分かるように、オランダ領アンティルという名称になってからも、キュラソーの首都ウィレムスタットがオランダ領アンティルの首都として機能していた。

ABC諸島には産業らしい産業もなかったが、キュラソーは、オランダの領土となる前の15世紀から、ラテンアメリカやカリブの第一次産品をヨーロッパに輸出するための自由貿易港として機能していた。キュラソーでは、スペイン帝国銀貨やポルトガル金貨などが流通していたのである。キュラソーを自国の領土としたオランダ王国は、この状況を利用し、キュラソーをオランダ王国とアメリカとをつなぐ中継貿易港、および、トレード・センターにしようとした [https://www.centralbank.cw]。

<sup>8</sup> ただし、シェンゲン協定と欧州付加価値税領域の対象にはなっていない。



キュラソーに銀行が設立されたのは1828年で、カリブを含むアメリカ大陸でもっとも古い中央銀行である[<https://www.centralbank.cw>]。今では「キュラソー&シント・マールテン銀行」という名称となった同銀行の公式ホームページによると、金貨や銀貨は少額取引のために小さく切断されることもあったが、商人たちが、切断された金貨や銀貨の価値を推測せざるを得ない状況を利用して、金利を得るために実際の価値より高く見積もったため、混乱するに至った植民地財政の解決策として、銀行が設立されたという[<https://www.centralbank.cw>]。国立銀行として財務部の一部を担っていたこともあり、設立当時には正式名称がなく、単に銀行、または、政府銀行、信託銀行、もしくは、銀行が設立された場所にちなんでキュラソー銀行と呼ばれることもあった[<https://www.centralbank.cw>]。1879年にはキュラソー銀行(Curacaosche Bank)という透かしを紙幣に取り入れている[<https://www.centralbank.cw>]。

1890年から1924年にかけて、地域での財政赤字が深刻化すると、キュラソー銀行をアムステルダムのネーデルラント銀行と統合する、もしくは、オランダ領ギアナ(現在のスリナム)の首都パラマリボにあるスリナム銀行と統合するかが議論となったが、結局、オランダ本国はキュラソー銀行を存続させる決定をしている。

第二次世界大戦前まで、オランダ植民地ギルダールの価値は、宗主国オランダのギルダーとリンクしていた[加藤 2014]。しかし、第二次世界大戦でオランダがドイツに侵攻されると<sup>9</sup>、ヨーロッパのオランダ・ギルダーとオランダ植民地ギルダーとの関係が切れ、本国ギルダーとの代替として、オランダ植民地ギルダーと米ドルとのリンクが設けられた[加藤 2014]。

しかし、当時はまだオランダ領アンティル・ギルダーという名称は存在せず、通貨名称はオランダ領アンティルがこの地域の正式な名称となった後の1952年に定まったようである[加藤 2014]。

いずれにせよ、オランダ領アンティルでは、フランス海外県と異なり、すでに、ヨーロッパ本国との通貨の関係が切れていた。

このような事情から、ヨーロッパのオランダがユーロに通貨を移行しても、

<sup>9</sup> オランダは1940年5月10日にドイツに侵攻され、南部は1944年秋に解放されたが、その他の地域は1945年5月まで占領されていた。

オランダ領アンティル諸島ではアンティル・ギルダーの使用が続けられた。

1986年1月1日、単独でオランダ領アンティル諸島から離脱し、国としてのステータスを得たアルバでは、完全独立を目的としていたこともあり、離脱した1986年から自国通貨を発行している。それが、独立を想定して設立されたアルバ中央銀行（Central Bank of Aruba）が発行するアルバ・フロリン（AWG）という通貨である。

そして、アルバがオランダ領アンティルを離脱し、王国を構成する「国」として独自通貨を発行すると、かねてから諸般の問題を抱えていた6島のバランスがいよいよ崩れてくるのである。

そもそも、ABC諸島とSSS諸島との経済事情は大きく異なっており、また、双方の経済的影響は全くなかった。

シント・マールテンがアルバの独立に続こうとしたのには、キュラソーに対する敵愾心が強く影響している。OostindieとVertonの調査によると、シント・マールテンでは、自分たちがオランダ本国と直接交渉できないこと、つまり、キュラソーを通じてしかオランダ本国との関係を持ってないことに対する反発の声が強い [Oostindie & Verton 1998]。

シント・マールテンの人々は、キュラソーがオランダ領アンティルを牛耳っているがゆえに、シント・マールテンが不利益を被っていると考えており、OostindieとVertonによるインタビューに答えた一人は、「キュラソーの首相がすべての金を持っていく」 [Oostindie & Verton 1998 : 65] とまで言っていた [Oostindie & Verton 1998]。

シント・マールテンの人々にとって、アルバの独立は、キュラソーからの独立と映っていたのである。

前述したように、1969年まで、アルバとキュラソーは、ともに、石油精錬所で潤い、その後の衰退を経験している。しかし、オランダからの独立意識は、キュラソーでは盛り上がり、アルバで隆起した。この背景には、オランダ領アンティルにおけるキュラソーの特権的な地位が影響していたと考えるのが自然であろう。

つまり、アルバのようにキュラソー島が単独でオランダ領アンティルからの離脱を表明するとなれば、それまでキュラソーを介して行われていたアン

ティル諸島とヨーロッパ・オランダとの関係に変化が生じるのは必至であり、また、それまでキュラソーが行政官として支配していた諸島を手放すことにもなってしまうのだ。

6島で構成されていたオランダ領アンティルから単独で離脱するのは、キュラソーにとって、地位の低下を招く恐れがあったのである。

キュラソーにとっては、オランダ領アンティル全体が、従来通り、キュラソーを首都とする諸島として独立するのが望ましい。しかし、ABC諸島とSSS諸島は、地理的に離れているだけではなく、社会文化や経済の面でも、また、大きく異なっていることが、問題を複雑にしている。

言語の面では、SSS諸島、ABC諸島、いずれも、オランダ語のプレゼンスは小さいが、SSS諸島では英語が主流であるのに対し、ABC諸島ではパピアメント語が話されている。しかも、SSS諸島それぞれも、また、異なる経済事情を抱えており、ボネールとアルバの事情もまったく異なる。そして、なによりも、シント・マールテンにおけるキュラソーに対する敵愾心の強さが、オランダ領アンティル6島、もしくは、アルバ以外の5島がそろって独立する可能性を喪失させているといえよう。

アルバのオランダ領アンティルからの離脱後、シント・マールテンで顕著となったのは、自分たちも独立が可能なのではないかという自負と、キュラソーに対する敵対心である。また、ボネールでも、キュラソーを介さず、オランダとの直接取引を歓迎する意見があがった。

しかし、キュラソーを除く5島が、それぞれ、キュラソーを介してのみオランダ本国と取引が可能であることに不満を抱いていたとしても、そのことが、オランダ本国政府に対する信頼を意味するのではないということにも、注意が必要である。

つまり、キュラソーを介してではなく、直接オランダ本国と取引したいという望みが、オランダ本国との関係強化を希望することを意味するのではなく、むしろ、それぞれの島で事情や状況が異なるにもかかわらず、それが認められないことへの不満であり、それぞれの島が個々の事情に応じて個別にオランダ本国と交渉したいという願望だったのである。

1993年から1994年にかけては、アルバで1977年に行われたのと同様、独立

の是非をめぐる住民投票が、今度はアルバ以外の5島で実施された。その結果、いずれの島においても、独立に賛成したのは、ごく少数であった。

この国民投票は、独立か現状維持かの二者択一のみで、オランダ領アンティルの解体の是非や構成国など新しいステータスなどの選択肢は問われていない。OostindieとVertonのインタビューでは、国民投票で独立に賛成する意見が低かったとはいえ、それが現状維持を肯定するものではないことが明らかにになっている [Oostindie & Verton 1998]。

独立も可能であると自負していたアルバとシント・マールテンでは、オランダ政府による島の経済への介入に対する反発が強い。特に、シント・マールテンは、オランダ企業が島内で活動することに反対する唯一の島で、オランダ企業は島の利益を的確に代表していないとみなしており、オランダの金融政策は不要だと思っている [Oostindie & Verton 1998]。また、シント・マールテンの人たちは、ヨーロッパからオランダ国籍の人が島に移住することについてもっとも否定的で、ヨーロッパからのオランダ人行政官、海軍、警察の移住に消極的な姿勢を示していた [Oostindie & Verton 1998]。また、現地政府に対する信頼も強く、オランダ王国に対する姿勢は、他の島より批判的であった [Oostindie & Verton 1998]。

シント・マールテンがアルバに続いて独立しようとしていたのは、キュラソーへの反発と同時に、オランダ政府に対する不信感、そして、自身の島に対する経済的、政治的信頼に支えられてのことだったことが分かる。

一方、ボネール、サバ、シント・ユースタティウスでは、オランダ企業の操業や金融政策に肯定的な意見が多く、また、この3島では、アンティル5島の結びつきを継続することの重要性が強く意識されていた [Oostindie & Verton 1998]。ボネールの住民の大多数は、オランダ領アンティルの解体を望んでおらず、5島一緒に留まることを望んでいたが、一方、キュラソーを介さず、オランダ本土と直接に関係を結ぶことには好意的であった [Oostindie & Verton 1998]。

オランダ領アンティルを構成していた島では、唯一、シント・ユースタティウスにおいてのみ、海外県というステータスが可能性として肯定されたが、それ以外の島では、海外県というステータスに対しては強い反発が見られた

[Oostindie & Verton 1998]。

このように、アルバの離脱によって、島それぞれの言語文化や経済規模の違いが顕在化されたのである。

2000年、再度、各島で住民投票が実施され、2008年12月15日限りでオランダ領アンティルを解体することが決定した。

しかし、解体後の各島の地位やEUとの関係などの調整がつかず、解体は先送りにされていた。

最終的に、キュラソーとシント・マールテンが、アルバと同様、オランダ王国を構成する国となり、ボネール、サバ、シント・ユースタティウスは特別自治体としてオランダ本土に編入されることが決まった。

その際、通貨に関して、アンティル・ギルダーに代わるカリビアン・ギルダーの発行が予定され、キュラソーとシント・マールテンの共通通貨であることから、略称はCM gと決まった。しかし、その後、オランダ領アンティルを構成していた島のなかでも特に反目する両島が、通貨を通じた同盟関係を結ぶことができるかどうか危ぶまれることになる。各島がアルバのように独自に中央銀行を設置する可能性を探るのか、もしくは、東カリブドルのような地域通貨を目指すのか、さまざまな意見が提示されたが、まとまることはなかった。結局、それまでキュラソーに置かれていたオランダ領アンティル銀行（the Bank of the Netherlands Antilles）がキュラソー&シント・マールテン銀行と名称を変更し、シント・マールテンにも銀行を設置、2014年4月、アンティル・ギルダーを引き続き使用することで両島の話し合いが一応のまとまりをみせた。

なお、特別自治体となるボネール、シント・ユースタティウス、サバのBES諸島は、オランダ領アンティル解体の際、米ドルを使用することを決定し、2011年1月から米ドル使用となっている。



キュラソーで使われているアンティル・ギルダー（2019年2月26日筆者撮影。実際に筆者がフィールド・ワーク中に使用していたもの）





パピアメント語を共通言語とし、地理的にも近い ABC 諸島で共有されている新聞。右上に新聞の値段が表示されており、キュラソーでは 1.5 アンティル・ギルダール（オランダ・ギルダールと同様、フロリンという通称が使用されている）、アルバでは 1.75 アルバ・ギルダール（フロリン）、そして、ボネールでは 1 ドルである。

### 3. 旧オランダ領アンティルの人々にとってのナショナルアイデンティティとは

2010年10月10日のオランダ領アンティル解体によってオランダ王国の構成国となったキュラソー、シント・マールテン、そして、すでに単独でオランダの構成国となっていたアルバは、外交と国防以外のすべての面、すなわち、教育、医療、税、住居、就労などにおける自治権を有することになった。これら構成国は、「国」とはいえ、正規軍はなく、オランダ王国政府が国防政策を、カリブ・オランダ沿岸警備隊（DCCG）が海上保安を担っている。

しかし、キュラソーでは、沿岸警備隊へのオランダ政府の介入に対する反発が強く、国際犯罪に対しては島だけで対応できるという自負も顕著である [Oostindie & Verton 1998: 67]。地理的にもキュラソーに近いアルバにおいては、ベネズエラをはじめとする他国に脅威を感じており、オランダの保護を求める声があがっているのに対して、キュラソーでは、ベネズエラを含

む他国の脅威は感じられておらず、オランダ湾岸警備隊も不要だという意見が多いのである [Oostindie & Verton 1998]。

この相違については、今後、更なる検証を必要とするであろうが、キュラソーとベネズエラとの数百年にわたる長い交流関係の歴史やベネズエラとの交易関係などがすでに確立していることなどが関係しているのではないだろうか。

キュラソー島の大地は乾燥しているため、果物や野菜はベネズエラから輸入している<sup>10</sup>。また、キュラソーでは、長い間、ベネズエラのテレビ放送を受信していたという。4つある放送局のうち、現在ではベネズエラのテレビ放送が2つに減ったが、それは、キュラソーに放送局ができたためであるという。

さらに、キュラソーには、ベネズエラ国営石油会社PdVSAの精錬所があり、そこでは、1000人の労働者が直接雇用によって働いていた<sup>11</sup>。

オランダ本国とオランダ領アンティルとの関係に決定的な変化を生じさせたのがキュラソー暴動であり、暴動の根本原因が、キュラソーに設置されたロイヤル・ダッチ・シェル社の、地元キュラソー人やその他の「非白人」に対する差別的な雇用条件にあったことは、すでに述べた。

旧宗主国であるヨーロッパ・オランダが現地の雇用を搾取していたのに対し、ベネズエラの石油精錬所は、ヨーロッパ・オランダがヨーロッパのオランダ人のみに対して行った「特権的」雇用形態を地元の人々に与えていたことになる。

食料や報道などの情報源を、オランダ本国ではなくベネズエラに依存していたというキュラソーの長年の歴史に加え、ベネズエラの投資が差別的ではなかったことが、ベネズエラに対する信頼を補強する要因となっていると考えられるであろう。キュラソーを「対等」な相手とみなすベネズエラのような国が近くにあるが、他方、オランダ本国政府は、キュラソーに対してどのような態度で対応してきたのか。オランダ本国政府は、キュラソーに何かをもたらしたのだろうか。

<sup>10</sup> キュラソー、そして、アルバとボネールは、トリニダード島とともに、貿易風の通路から外れ、乾燥度の高い地帯となっている [国本 2017: 20]。

<sup>11</sup> 2021年現在、PdVSAがまだキュラソーで操業しているのかは未確認であるが、少なくとも2019年までは操業していた。ちなみに、この精錬所で精錬されたベネズエラ産の石油は、その大部分がアメリカ合衆国とアジアへ輸出されていた。





キュラソーの市場（2019年2月26日筆者撮影）

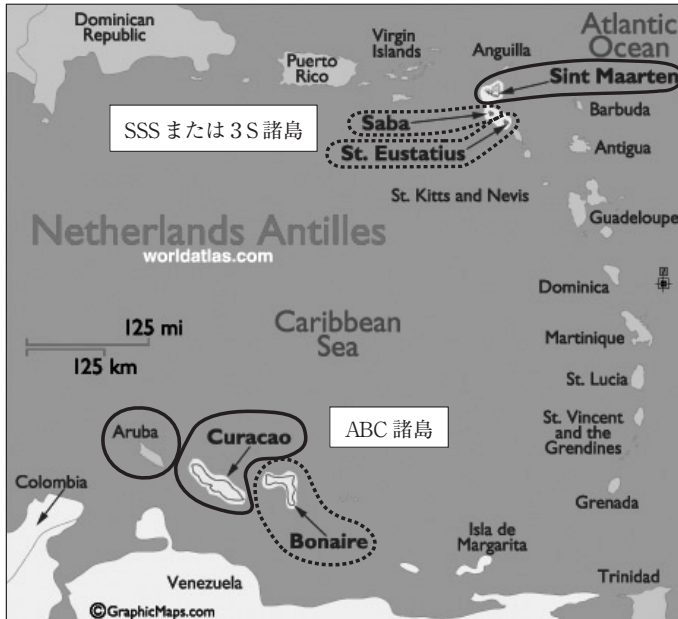
ここにある果物はすべてベネズエラから輸入されたもので、商人たちの共通言語はスペイン語である。

オランダ領アンティルを構成してきた6島のうち、サバ以外の5島では、常に、オランダ本国政府が各島を理解しておらず、オランダ本国政府による島の経済への介入は、島ではなくヨーロッパに利益が還元される仕組みになっているという不満が高い [Oostindie & Verton 1998]。また、ヨーロッパ・オランダ人に対する不信感も根強い [Oostindie & Verton 1998]。

このような不満や不信感は、富を搾取するヨーロッパの宗主国と収奪される植民地という構造が、未だ存在することを示唆しているといえよう。

OostindieとVertonによるアンケートでは、いずれの島においても、ヨーロッパからのオランダ人の移住を歓迎していないことが分かっている [Oostindie & Verton 1998]。

筆者も、ヨーロッパ・オランダでキュラソー出身の女性と知り合い、キュラソーに移住した男性から、「パピアメント語を話さない人物をキュラソー人は信用しない。いや、信用しないというより、むしろ、憎んでいるようだ」、「オランダ語と英語しか話さない人間がなぜキュラソーにいるのかとキュラソーの人たちは訝り、何か悪いことをして本国から逃げてきたのではないのかと



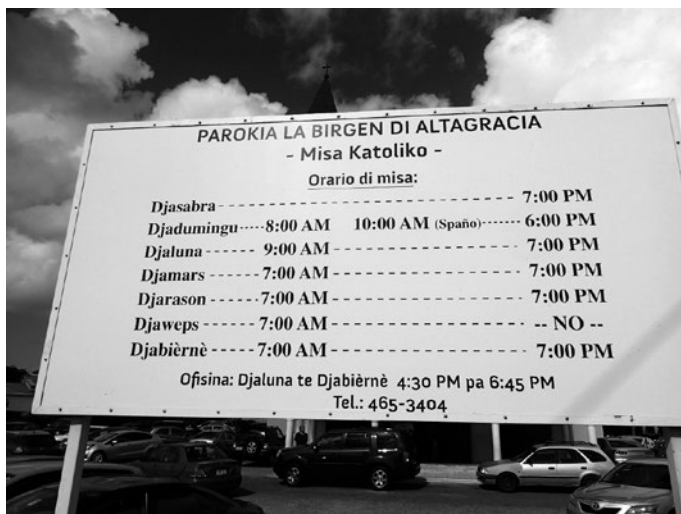
実線で囲んだ島がオランダ王国構成国 破線で囲んだ島が特別自治体（BES諸島）  
Map: www.worldatlas.com を基に筆者作成

疑ったりする」という話をきいた。オランダ語と英語が話せても、その二つの言語は、外国からの観光客と会話する程度にしか使えないと嘆いた。そして、「パピアメント語を話さない住人は、観光客よりもびくびくしながら生活している」と言い、筆者に対して、「君はスペイン語ができるから、僕より多くの人にインタビューできるよ。羨ましいな」とまで言った。

パピアメント語学校でも、「パピアメント語が話せないとキュラソーでは生活できない」ため、ヨーロッパ・オランダからの移住者の受講が多いという。

一方、キュラソー人にも、言語に関する不満が聞かれた。

小学校からの教育はオランダ語で実施されるため、子どもたちは、小学校に入学してはじめてオランダ語に触れる。しかし、日常生活ではオランダ語を話す機会がないため、キュラソーに限らず、島民の学力は著しく低い。6島すべてで、ドロップアウトや留年する児童が多いことが問題視されている [Oostindie & Verton 1998]。



カトリック教会のミサの時間を記した告知。すべてパピアメント語で、上から二番目の午後6時のミサはスペイン語で行われることが、パピアメント語で記されている。(2019年2月24日筆者撮影)

オランダ領アンティルを構成していた島の住民の多くがヨーロッパ・オランダへの移住を経験しているが、筆者がインタビューをした一人は、「せっかく学校でオランダ語を学んだというのに、実際にオランダに行ったら、僕のオランダ語は全く通じなかったんだ。そして、僕自身、オランダ人が話すオランダ語を全く理解することができなかった。道をきくことさえ、一苦労だったんだ。仕方ないから、語学学校に通ったよ。まったく、キュラソーで受けていたオランダ語による教育って、いったい何だったんだと思うよ。全く時間の無駄だった」と恨めしそうに語った。

前述した、キュラソーの女性と結婚した男性も、娘たちがパピアメント語を話すので、父親である自分は家族の会話についていけず、疎外感を感じていること、そして、「キュラソーの教育水準が心配なんだ。教育水準が低いんだよ。娘たちのために、ヨーロッパ・オランダに戻りたいのだから…」とこぼしていた。

OostindieとVerthonのインタビューでは、ヨーロッパ・オランダ人がアンティル6島に移住する際の条件がないにもかかわらず、オランダ本国政府がオラ

ンダ語の語学力によって移住を拒否しようとすることに、すべての島が強烈に反対した<sup>12</sup> [Oostindie & Verton 1998]。また、島の教育水準を向上させるためにも、児童への奨学金など教育におけるヨーロッパ・オランダの支援が必要であると訴えているが、2010年に改正されたオランダ王国憲章では、教育に関しても構成国には自治権があり、王国は介入できないことになっている。

アンティル諸島民、なかでも、構成国となったアルバ、キュラソー、シント・マルテンでは、オランダの庇護は必要ではなく、むしろ、これまでの搾取的な関係ではなく対等な関係を求める声が強い。オランダと同じオランダ王国を構成する国となったことで、自治権は拡大したが、宗主国と植民地という構造自体は、依然として残っているようである。

それでは、なぜ、アルバは、当初目指していた独立を求めず、構成国に留まることにしたのか。また、同様に独立を目指していたシント・マルテン、そして、キュラソーの人々は、現状に関して、どう思っているのだろうか。

アルバやキュラソーが王国内に留まることにした大きな理由は、オランダのパスポートにあったようである [Oostindie & Verton 1998]。オランダのパスポートがあれば、オランダで勉強でき、欧州連合内のオランダに居住することやオランダの経済的軍事的保護を受けることができる。

しかし、興味深いことに、フランスの海外準島のサン・マルタンと島を共有しているシント・マルテンでは、オランダではなく、フランスやイギリスのパスポートを求める声もあがった [Oostindie & Verton 1998]。

独立への意欲をみせていたこともあるシント・マルテンにとって、国とは、パスポートとは、どのような意味をもつのだろうか。

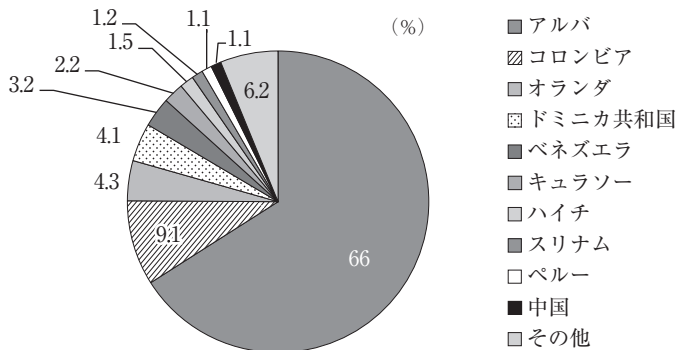
オランダ領アンティルと本国との関係は、歴史的にも、強固だったとはいえない。それは、言語面においても、そして、本国とは切り離された独自通貨をもつことから明らかである。

以下に、アルバ、キュラソー、シント・マルテンそれぞれの島における

<sup>12</sup> オランダ語能力による移住の可否は、議論にはあがったものの、実施されていない。オランダ王国の一部である旧オランダ領アンティルとヨーロッパ・オランダとの往来は、原則として自由である。

住民の出生地の割合、家庭内で最も話されている言語1つ、宗教に関するデータを記す。

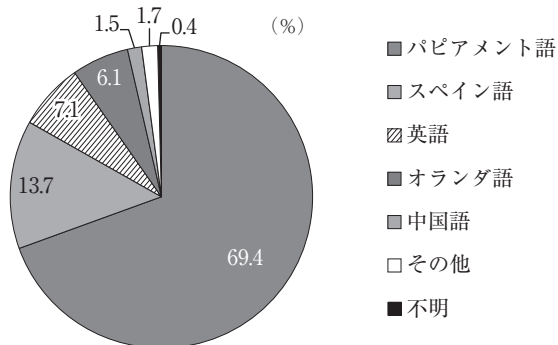
アルバ住民の出生地（2010年）



CIA

[<https://www.cia.gov/library/publications/resources/the-world-factbook/geos/aa.html>]

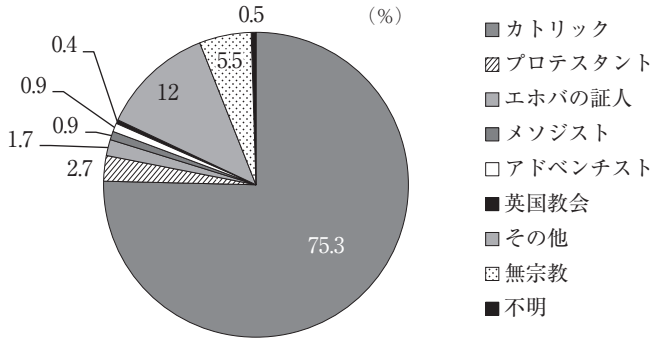
アルバの家庭内で最も話されている言語1つ



CIA

[<https://www.cia.gov/library/publications/resources/the-world-factbook/geos/aa.html>]

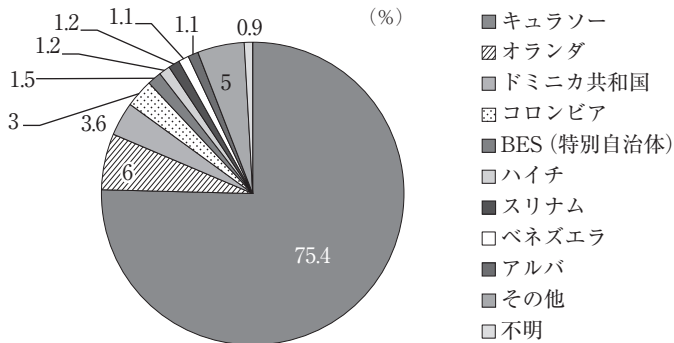
アルバで信仰されている宗教



CIA

[<https://www.cia.gov/library/publications/resources/the-world-factbook/geos/aa.html>]

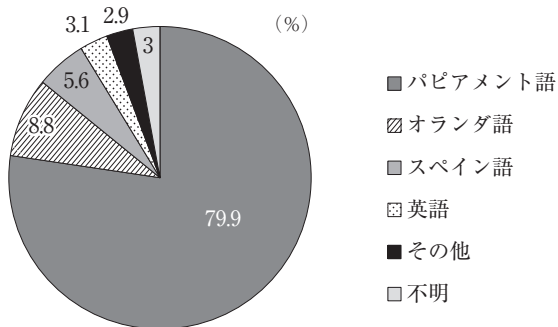
キュラソー住民の出生地 (2011年)



CIA

[<https://www.cia.gov/library/publications/resources/the-world-factbook/geos/uc.html>]

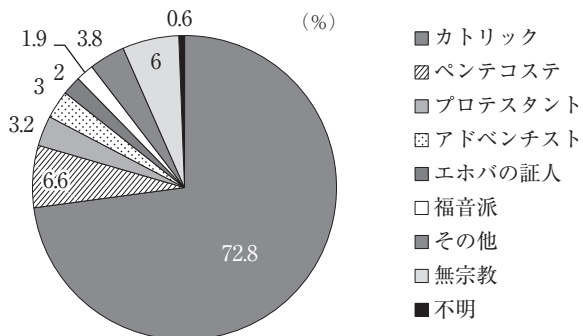
キュラソーの家庭内で最も話されている言語 1つ



CIA

[<https://www.cia.gov/library/publications/resources/the-world-factbook/geos/uc.html>]

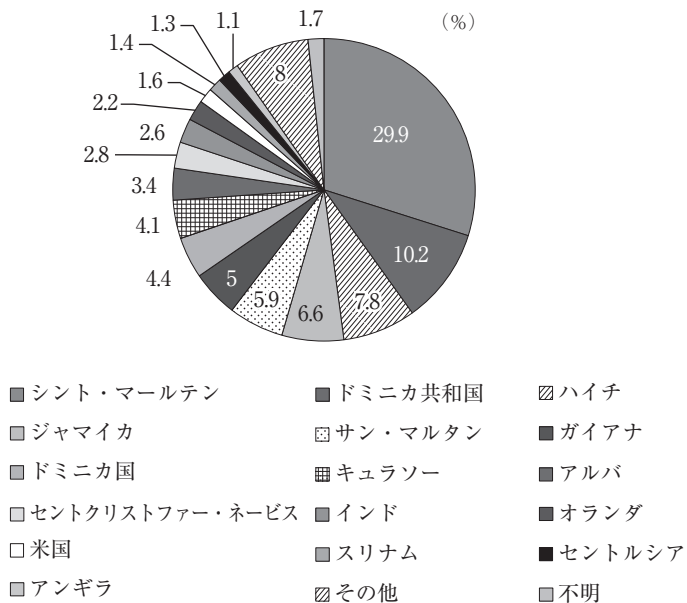
キュラソーで信仰されている宗教



CIA

[<https://www.cia.gov/library/publications/resources/the-world-factbook/geos/uc.html>]

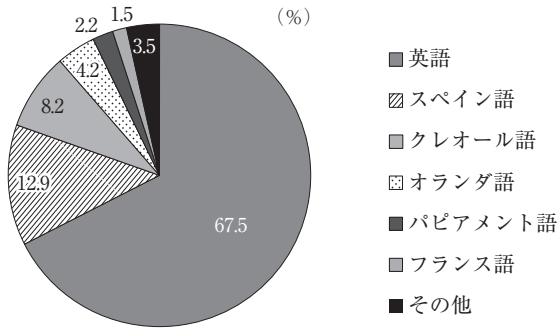
シント・マールテン住民の出生地 (2011年)



CIA

[<https://www.cia.gov/library/publications/the-world-factbook/geos/sk.html>]

### シント・マールテンの家庭内で最も話されている言語 1つ



CIA

[<https://www.cia.gov/library/publications/the-world-factbook/geos/sk.html>]

これらのグラフをみると、アルバやキュラソーでは地理的にも近いコロンビアやベネズエラ出身者が、そして、英語が最も話されているシント・マールテンでは、英語圏であるジャマイカ、ドミニカ国、ガイアナ、セントルシア、セントクリストファー・ネイビス、また、イギリス海外領アンギラ出身者が目立つ。また、シント・マールテンでは、島の北側サン・マルタンからも移住者がいる。

シント・マールテンでオランダのパスポートではなく、フランスやイギリスのパスポートを望む声がかかれたのも、このような事情が影響しているものと思われる。すべての島でオランダ語のプレゼンスが低いことはすでに述べたが、シント・マールテンでは英語が通じるため、言葉が通じないオランダよりイギリスのパスポートが望まれるのであろう。

パスポートが国家とイコールではなく、もちろん、自身の帰属意識（アイデンティティ）とも関係ない、単に通行証のようなものと考えられているようである。

このような考え方は、従来のナショナルアイデンティティにはなかったものである。

旧オランダ領アンティル地域では、自分たちを、ヨーロッパ・オランダ人とは区別して考えており、オランダ人というアイデンティティはもっていない



い。

キュラソーでは、自分たちを「キュラソー人」と呼び、隣人を「アルバ人」と呼ぶ。それぞれの島民は、コロンビア人、ベネズエラ人、ドミニカ共和国人と同様の扱いで呼ばれる。

アルバやキュラソーでは、それぞれ国家、国旗扱いとなっているが、特別自治体に編入されたボネール、サバ、シント・ユースタティウスも、それぞれ、島独自の歌と旗をもつ。そして、アルバ、キュラソーのような「国」はもちろんのこと、ボネールでも、王国のではなく島の（国）歌、（国）旗への愛着が強い。



### ボネールの旗

オランダ王国の三色旗に敬意を払うために、赤、白、青それぞれの色を取り入れた。上部の黄色い三角形は太陽の明るい光とボネールの自然を表している。ボネールには黄色い花が多い。中央の白地にある星の色が赤。一番下には海の色である青が使われているが、大波または高い山のように見えるデザインは、我々の国家（原文 nation）の発展のために到達しなければならない波または山の高みを表現している。

ボネール観光局のホームページより [https://www.tourismonbonaire.com/bonaire-history-culture]

なお、ボネールでは、毎年9月6日にフラッグ・デイという大規模なイベントが開催される。

それぞれの島の文化は大きく異なり、カーニバルをはじめとする祝祭も、日程そのものが異なっている場合もある。

本国の影響をさほど受けずに済んだことから、それぞれの島で独自の経済、文化、言語が発展し、それらの違いは、当然、政策に対して独自の考えを主張することにもつながるであろう。

これらの島にとって、自治独立性が最も重要と考えられていることは明らかである。そして、現在まで、独立という選択肢を採っていないのは、独立するには経済規模が小さすぎるという消極的な理由からではなく、むしろ、ヨーロッパのパスポートという選択肢を敢えて切り離す必要はないという認識からのようである。

つまり、オランダ王国が、カリブ諸島に対する植民地主義的姿勢を改め、それぞれの島を尊重し、島の自治に過度な介入をしないのであれば、敢えて独立を叫ぶ必要もなく、ヨーロッパのパスポートという便利な道具が利用できるに越したことはない、という感覚なのである。

## 結

冒頭で述べたように、本稿は、これまであまり注目されてこなかったカリブ海の、旧オランダ領の島で2010年までに起こった、本国からの「離反」の動きに注目し、既存のナショナリズムや国家概念とは異なる概念の萌芽をとらえようとするものである。

全体の流れをまとめると、旧オランダ領アンティルでは、スリナムの独立に触発されてアルバが独立を目指すか、旧オランダ領アンティルの首都でもあったキュラソーでは、単独での独立は自らの地位の低下を招くことなどから、独立の動きは活性化しなかった。

そして、このキュラソーの立ち位置こそが、旧オランダ領アンティルの「独立」に待ったをかけたといえるのではないだろうか。

冒頭に挙げたキューバとプエルト・リコの場合、ともに、スペインからの独立を目指した独立戦争に米国が介入し、支配体制の違いはあるにせよ、実質的独立を阻まれ、植民地的状況を強いられたという経験を共有している。だからこそ、プエルト・リコの独立が、今日においても望まれている。

しかし、オランダ領アンティルの場合、それぞれの島が望んでいたのは、オランダ本国支配からの脱却と同時に、オランダ領アンティルを構成してい

るキュラソーも排除したいという複雑な構造があった。また、オランダ本国による島に対する支配が、スペインやフランス、および、実質的な宗主国として君臨するアメリカ合衆国に比べると緩やかで、それぞれの島が独自の言語文化を発展させ、近隣との交易等の自立性が保たれていた。

このようなオランダ領アンティルの状況が、「植民地支配からの脱却」を求める独立運動に向かわなかった根本要因であると考えられる。

今日まで、キュラソーとシント・マールテンは、アルバと同様、ヨーロッパ・オランダと対等にオランダ王国を構成する「国」として、自治権を持っている。

しかし、これは現時点における一時的状態であり、オランダ領アンティル解体の要因ともなったキュラソー暴動のような出来事が発生すれば、状況が変化する可能性を孕んでいることを最後に記しておきたい。

筆者がフィールド・ワークを行っていた2019年2月から3月にかけて、キュラソーは、ベネズエラ情勢の混乱の影響を多大に受けていた。その経緯は、次のようなものである。

2019年1月23日、ベネズエラで、国会議長であったファン・グアイドが勝手に暫定大統領を名乗りでた。この背景には、米国トランプ大統領によるベネズエラの石油収奪の思惑があり、グアイド政権とは、アメリカ合衆国の傀儡政権と同義である。さらに、同年1月26日には、米国国家安全保障担当大統領補佐官ジョン・ボルトンが、ベネズエラの隣国であり親米国家であるコロンビアへ5000人の米軍部隊を派遣したと記者会見で述べた。

米国による侵略の危機に、選挙で国民に選ばれたベネズエラの正当な大統領であるニコラス・マドゥーロは、陸、海、空すべての外国との路を絶つことにする。これは、キュラソーに深刻な食糧難を引き起こした。

そして、食糧難に陥ったキュラソーに対して王国が行ったのは、米軍のためにキュラソーに軍事拠点としての使用を認めるというものであった。

これに対して、キュラソー国民は大激怒していた。

すでに述べたように、キュラソーは、食糧、報道、石油精錬所等、オランダ本国よりもベネズエラの恩恵を多大に受けており、ベネズエラとの良好な関係がなければ、市民生活そのものに直接的な影響がでる。オランダ王国がキュラソーに対してなんらかの援助、もしくは、補償を行わないのであれば、

キュラソーが自国の存亡のために、オランダ王国との決別、すなわち、独立という選択肢を考慮するかもしれない。

旧オランダ領アンティルを構成していた島々にとって、現状は、より快適な状況を求めて試行錯誤の末にたどり着いた状態である。そして、より快適な状況を求める試行錯誤は、今後も続いていくのではないだろうか。

## 資料等

### • インターネット資料

在日オランダ大使館・領事館・名誉領事館のウェブサイト（日本語のほか、オランダ語、英語、スペイン語等各国語の情報あり）

[www.orandatowatashi.nl](http://www.orandatowatashi.nl)

オランダで唯一の全国紙NRC Handelsblad

<https://www.nrc.nl/>

キュラソー島総督ホームページ（基本はパピアメント語。その他、英語とスペイン語、オランダ語にも対応）

<http://www.kabinetvandegouverneur.org/en>

キュラソー政府ホームページ（2019年確認時点ではスペイン語や英語にも対応していたが、2020年10月現在パピアメント語とオランダ語のみになった）

<https://gobiernu.cw/>

アルバ島総督公式ホームページ

<http://www.kabga.aw/WP/>

アルバ観光局ホームページ

<https://www.aruba.com/>

アルバ中央銀行ホームページ

<https://www.cbaruba.org/cba/home.do>

ボネール観光公社ホームページ

<https://www.tourismbonaire.com/>

シント・マールテン島総督ホームページ（オランダ語、英語のみ）

<http://www.kabgsxm.com/default.aspx?language=EN>

シント・マールテン政府公式ホームページ（基本は英語。その他、スペイン語とフランス語）

<http://www.sintmaartengov.org/Pages/default.aspx>

キュラソー&シント・マールテン銀行ホームページ

<https://www.centralbank.cw>

CIA, the world factbook（2020年9月11日アップデート）シント・マールテン

<https://www.cia.gov/library/publications/the-world-factbook/geos/sk.html>

CIA, the world factbook（2020年9月10日アップデート）アルバ

<https://www.cia.gov/library/publications/resources/the-world-factbook/geos/aa.html>

CIA, the world factbook（2020年9月10日アップデート）キュラソー

<https://www.cia.gov/library/publications/resources/the-world-factbook/geos/uc.html>

World Population Review

<http://worldpopulationreview.com/countries/netherlands-population/>

#### • 文献

Allen, Rose Mary, 2010, "The Complexity of National Identity Construction in Curaçao, Dutch Caribbean", in *European Review of Latin American and Caribbean Studies* (89): 117-125. doi:10.18352/erlacs.9461. ISSN 0924-0608

Anderson, William Averette & Russell Rowe Dynes, 1975, *Social Movements, Violence, and Change: The May Movement in Curaçao*, Columbus, Ohio State University Press. ISBN 0-8142-0240-3.

Blakely, Allison, 1993, *Blacks in the Dutch World: The Evolution of Racial Imagery in a Modern Society*, Bloomington, IN: Indiana University Press. ISBN 0-2532-1433-5.

Oostindie, Gert & Peter Verdon, 1998, "Ki sorto di Reino/What kind of Kingdom?: Antillean and Aruban views and expectations of the Kingdom

- of the Netherlands”, in *New West Indian Guide / Nieuwe West-Indische Gids*, 72 (1-2): 117-125. doi:10.1163/13822373-90002599. ISSN 2213-4360
- Oostindie, Gert & Inge Klinkers, 2003, *Decolonising the Caribbean: Dutch Policies in a Comparative Perspective*, Amsterdam, Amsterdam University Press. ISBN 90-5356-654-6.
- Sharpe, Michael Orlando, 2015, “Race, Color, and Nationalism in Aruban and Curaçaoan Political Identities”, In Essed, Philomena & Isabel Hoving (eds.), *Dutch Racism*, Amsterdam/New York: Brill. pp. 117-131.
- Wielenga, Friso, 2010, *A history of the Netherlands: From the sixteenth century to the present day*, Bloomsbury Academic, Great Britain. ISBN 978-1-3500-8730-9

• その他（オランダ領アンティルに焦点を絞ったものではないが、関連文献として）

- アンチオーブ、ガブリエル（石塚道子訳） 2001 『ニグロ、ダンス、抵抗—17～19世紀カリブ海地域奴隷制史』人文書院
- 小川浩之 2012 『英連邦—王冠への忠誠と自由な連合—』中公叢書 中央公論新社
- 加藤淳 2014 「欧米先進国の海外領土の通貨について」公益財団法人 『国際通貨研究所ニュースレター』2014.07.30 (No.28, 2014) 1 - 15 頁
- 北村由美 2016 「オランダに移住したインドネシア華人のライフストーリー：インドネシア独立から9・30事件を経て」『20世紀アジアの国際関係とインドネシア華人の移動』19 - 43 頁 京都大学
- 国本伊代（編） 2017 『カリブ海世界を知るための70章』明石書店